

はしがき

本研究は、令和4年度日本大学経済学部産業経営動向調査研究（期間：令和4年4月1日から令和6年3月31日）の成果として、「地方圏と都市圏における伝統的祭礼と社会関係資本に関する調査研究」と題してまとめた報告書である。

本研究のアンケート調査の実施にあたり、徳島市民の皆様と有名連に所属する皆様、徳島市にぎわい交流課には多大なるご支援とご協力をいただいた。ここに記して心より感謝申し上げます。

1) 研究当初の背景

研究当初の背景として、徳島市阿波おどりや青森ねぶたなどの地方圏における伝統的祭礼は、かつては人口増加と経済成長を背景に、経済活動と観光を優先して規模を拡大させてきた。しかし、近年では担い手の減少、娯楽の多様化等による観光客の減少に直面し、さらに、コロナ禍で開催中止を余儀なくされるなど、持続可能性が損なわれようとしていた。このような状況にも関わらず、どの地域の祭礼でもその地域経済への経済波及効果が十分に定量的に示されていないだけでなく、学術面においても、伝統的祭礼の社会的意義を明らかにすることを目的とした研究は事例研究を除いて、管見の限り存在していなかった。特に、伝統的祭礼や伝統を支える団体の活動（阿波おどりの場合は連やその踊り手等）の意義を多面的に評価する研究、具体的には、祭礼に関わる住民のソーシャル・キャピタルの形成に与える影響の評価を目的とした定量的研究は存在していなかった。

2) 研究の目的

本研究の目的は、第1に、地方圏の祭礼の代表的な存在である徳島市阿波おどりを対象とした市民アンケート調査を通じて、市民の阿波おどりとの関わりが、人と人とのつながりなどのソーシャル・キャピタルや日常生活の質（QOL）などに与える影響を調査すること、第2に、徳島市阿波おどりの踊り手である連員を対象としたアンケート調査を通じて、踊り手組織である連の課題、連や連員のコロナ禍で受けた活動制限等の実態、さらに、連員個人の阿波おどりとの関わりが、人と人とのつながりなどのソーシャル・キャピタルやQOLなどに与える影響を調査することで、徳島市阿波おどりに代表される伝統的祭礼の存在意義を学術的に明らかにすることである。

3) 研究の方法

本研究は、徳島市民や阿波おどりの連員の阿波おどりとの関わりが、人と人とのつながりや日常生活などに与える影響を調査し、徳島の伝統文化である阿波おどりの意義を学術的に明らかにすることを目的として、徳島市民と阿波おどりの連員を対象とした二つのアンケート調査を実施した。

4) 研究における代表者及び分担者の分担内容及び相互関連性

代表者は地域活性化を目的としたアートイベントが地域住民の社会関係資本形成に与える効果について、アンケート調査と定量分析を行ってきた研究実績があり、アンケート調査の設計や実施、アンケート調査の分析を主に担当した。副代表者の渡邊隼専任講師はこれまで都市・地域におけるコミュニティの形成と変容を主題として調査研究を行ってきたため、徳島市阿波おどりに対する市民意識とソーシャル・キャピタルの事例研究を主に行った。分担者の川瀬晃弘教授は、社会保障や環境分野における高度な定量分析による多数の研究実績があり、研究代表者と共に、住民アンケート調査を実施し、アンケート調査の定量分析を中心に行った。

5) 研究成果

①市民アンケートの調査結果

2022年において、阿波おどりと（観覧以外の）関わりを持つ市民は5%程度であった。コロナ禍の影響で関わりを持たなくなった市民も一定割合で確認されたが、踊り手や連への協力、地域や町内会を通じた活動、阿波おどりの運営のサポート等のボランティアで実際に関わりを持っている市民は多くない。他方で、過去に関わりを持っていた市民は23%いることから、市民の30%弱が実際に（観覧以外の）関わりを持った経験があることが確認された。また、過去も含め、さらに観覧という広い意味で阿波おどりととの関係を捉えれば、実に市民の80%がなんらかの形で阿波おどりととの関わりを持った経験があることが明らかになった。一方で、過去から何の関わりも持っていない市民はおよそ20%にすぎなかった。また、阿波おどりととの関わりは、現在も過去も、「連員」や「仕事」を通じた関わりが中心である。市民の阿波おどりととの関わりは、「地域や町内の活動」や「ボランティア活動」といった自発的な社会参加・活動とは多くの場合切り離されており、現在も過去も社会参加・活動を通じて阿波おどりととの関わりを持つ市民は少ないことなどが確認された。

②連員アンケートの調査結果

連員の活動への参加度を見ると、「ほぼすべての活動に参加」と「多くの活動に参加」を合わせた割合が、コロナ禍前の2019年は82.0%であったのに対して、コロナ禍の2022年では63.6%となり、20ポイント程度低下し、コロナ禍においては連員の活動が制限されたことが確認された。一方で、2023年の同割合はコロナ禍前と同水準の80.0%まで回復している。コロナ禍で受けた連の活動の主な制約は、「練習に参加できる連員の減少」や「おどりを披露する機会の減少」であり、90%弱の連員が回答した。そのうち、練習やおどりの量が半分以上まで減少したと回答した連員の割合は70-80%程度に及ぶこと、連の活動における今後の課題については、86.9%が「連員数の確保」、75.1%が「若い連員の確保」を挙げており、活動を維持するためには、若年層へのすそ野拡大が課題であることが確認された。

③ソーシャル・キャピタル

市民調査より、地域への愛着は居住地域と居住者とのつながりや居住継続意志を示すものであり、70%超の徳島市民が居住地域に愛着を持っていることや、コロナ禍でQOLは悪化し、特に生活満足度は大きく悪化したこと等が確認された。ソーシャル・キャピタルについては、家族とのつながりや学校や職場の人との付き合いなどは密であるが、付き合い・交流を示すソーシャル・キャピタルのコロナ禍での低下が顕著であることが確認された。地域内の知人を信頼（特定信頼）するポジティブな割合は高いが、地域内外の知らない人への信頼（一般信頼）は極めて低いことが確認された。コロナ禍の影響については、特定信頼と一般信頼のいずれも信頼の低下は確認されなかった。地域活動やボランティア活動・市民活動といった社会参加の程度はもともと高くないが、コロナ禍においてさらに低下していること等が確認された。

また、市民調査と連員調査を用いたソーシャル・キャピタルに関する実証分析からは、付き合い・交流では、近所付き合いの程度、趣味活動への参加の頻度は、連員のほうがポジティブな回答をする割合が高いことが確認された。また、信頼については、地域内の知人への信頼、地域内外の他人への信頼のいずれにおいても、連員のほうが「ある程度信頼できる」や「信頼できる」を回答する割合が高いことや、地域内外の他人への信頼は連員であることによって、「まったく信頼できない」を選択する確率が低くなること等が確認された。連の活動によって、同じ連の連員同士だけでなく、他の連（同地域や他県などの他地域）の連員同士のつながりを持つ機会があり、人間関係や信頼関係（ボンディング型とブリッジング型のソーシャル・キャピタル）の構築に寄与することが期待される。

6) 学会報告・発表論文

本研究では以下の学会発表、論文等による報告を行った。

〔学会発表〕

鷲見英司・川瀬晃弘「伝統的祭礼とソーシャル・キャピタル：阿波おどりの事例」日本計画行政学会第46回全国大会，2023年9月

鷲見英司「阿波おどりの連員とソーシャル・キャピタル」日本社会関係学会第4回研究大会，2024年3月

川瀬晃弘「伝統的祭礼とソーシャル・キャピタル：阿波おどりの事例」日本社会関係学会第4回研究大会，2024年3月

渡邊隼「伝統的祭礼とソーシャル・キャピタル 徳島阿波おどりの事例研究」日本社会関係学会第4回研究大会，2024年3月

〔発表論文〕

鷲見英司・川瀬晃弘・渡邊隼（2024）「『阿波おどりと地域社会との関わり』に関するアンケート調査報告」『経済集志』第93巻第3号，pp.19-52.

鷲見英司・川瀬晃弘・渡邊隼（2024）「徳島阿波おどりの連員を対象とした『阿波おどりと地域社会との関わり』に関するアンケート調査報告」『経済集志』第93巻第3号，pp.53-74.

